

モンゴル仏教における禪淨の研究

—瑞應寺の活仏と梵宗寺の活仏とを中心にして—

嘉木揚 凱 朝

キーワード

モンゴル仏教、瑞應寺、梵宗寺、坐禪と念仏、活仏

1. はじめに

本研究は、筆者が2004年6月30日から7月4日まで瑞應寺で執り行った『時輪金剛灌頂』の儀礼などに際して行なった現地調査、および2004年7月20日から7月23日まで参加した、梵宗寺の修復落典法要および翁牛特旗首届民族文化旅遊節を基とした実例研究である。

モンゴル仏教の特徴の一つは活仏であるとされる。モンゴル仏教徒の信仰意識で活仏は、諸仏・諸菩薩の再来であるとされる。だから、モンゴル地方の仏教寺院には、活仏がいるかないかは、寺院の運営に大きな影響を及ぼしている。例え瑞應寺と梵宗寺とは、他の多くのモンゴル仏教寺院と同様に、文化大革命で大きな打撃を受け、寺院全体が殆ど破壊されたことは周知の通りである。しかし、瑞應寺と梵宗寺とは、活仏がいることによって復興することができたと考えられる。だから、瑞應寺と梵宗寺及び両寺の活仏の由来を論述することによって、モンゴル仏教における禪淨の修行のあり方を明らかにしたいと考える。

仏教は、釈尊が出家後6年にわたる苦行の後、菩提樹の下で、坐禪三昧を通して永遠の真理を悟り、その後45年間にわたって教えを説き示された歴史的事実に由来する。

釈尊が衆生に説き示された四諦や八聖道、及び戒・定・慧の三学などの教えを、チベット語ではサンジェジタンパ (sañs rgyas kyi stan pa) という。「釈尊の教え」の意味である。

釈尊の教えは、中国人・カシミール人・チベット人の高僧たちによって、モンゴルの地に伝えられた。モンゴルの地に伝来したこの教えを、モンゴル人は、モンゴル語で、ボルカンノシャシン (borqan no zasin) と呼んだ。ボルカンノシャシンは、チベット語のサンジェジタンパと同じ「釈尊の教え」の意味である。釈尊の教えが、モンゴルの地に伝来した後、モンゴル語への仏典の翻訳が始まり、続けられた。これが後世、集大成されてモンゴル語『大蔵経』となった。今日では、モンゴル語『大蔵経』に加えて、独自のモンゴル

語の注釈などを加えたモンゴル語の論書などが完備されている。

モンゴルの地で信仰されている仏教の最大の特徴は、僧侶の在り様にある。モンゴルでは、僧侶は仏・菩薩の再来とされる。仏・菩薩の再来である僧侶の中に上師があり、上師の中に活仏がある。上師や活仏を含めた僧侶に篤い信仰を寄せるのが、モンゴル仏教徒である。モンゴル仏教徒は、仏教でいう四衆弟子から成る。モンゴル語では、比丘をアヤガ・タヒリク (ayaga takimlig)、比丘尼をチバガンチャ (cibaganca)、男居士をウルディ・シトゥゲン (eregtei sitügen)、女居士をウームクディ・シトゥゲン (emegtei sitügen) という。こうして釈尊と、釈尊の教えと、仏・菩薩の再来としての僧侶という仏・法・僧が備わった。モンゴル仏教では、これに上師を加えて「上師・仏・法・僧」としたのが「四宝」である。

仏教は、大きく分けると、南伝仏教(原始仏教と部派仏教)と北伝仏教(大乘仏教と密教)とになる。仏教は、世界の各国各地域に伝播すると、便宜上それぞれの国名や民族名を冠して、〇〇仏教と呼称される。例えば、仏教が中国に伝来後、中国仏教と呼ばれたように、日本仏教、韓国仏教、タイ仏教、スリランカ仏教、ネパール仏教、チベット仏教、モンゴル仏教、台湾仏教などと呼称されている。従来の仏教研究は、インド仏教や中国仏教のように、地域によって〇〇国の仏教と、範疇を限定した研究が多かった。私は、〇〇国の仏教という範疇を限定した仏教の研究より、一つの言語を共有している民族を単位にした研究の方が、現況を映し出し易いと考えている。言語を共有する民族文化は、国境を越えた文化遺産であるといえる。例えば、漢文化は、中国のみならず、台湾、香港、シンガポールなどを含んでおり、朝鮮文化は、北朝鮮、韓国、中国の延辺地方に存在する。モンゴル仏教という用語を用いたのは、モンゴル語を用いている人々が住む地域で行なわれているモンゴルに特有の文化は、中国内モンゴル自治区、東北三省、モンゴル国、ブリヤート(布里亚特)モンゴル自治共和国に及んでいる¹⁾。

いままで、モンゴル仏教における禅浄の修行に関する研究は、日本では見られないと思える。

2. 瑞應寺の活仏チャガン ディヤンチ ホトクトの禅浄の実践

モンゴルの地に仏教が伝来してまもなく、活仏制度という仏教を高揚する継承形態が生まれた。活仏たちは、モンゴル仏教の発展に大きな役割を果たしている。モンゴル仏教の大小寺院には殆ど活仏がいる。モンゴルの仏教寺院の殆どは、活仏たちによって建立されたと考えている。これらの活仏は、それぞれの地域や村などの森や山にある洞窟で坐禅し、念仏して悟りを開いてから、多くの民衆に説法したり、病気などを癒したり、あるいは神通力を現わしたりしたと伝えられている。

ここでは、事例として瑞應寺を開いた活仏チャガン ディヤンチ ホトクトの坐禅と念仏による偉業を紹介することにしたい。

まず、瑞應寺の歴史を簡単に紹介して置きたい。

中国で、チベットが「西藏」と呼ばれるのに対して、瑞應寺は「東蔵」と呼ばれ、内モンゴル地方で最大の寺院である。清朝の康熙八年(1669年)から建設が始まった。瑞應寺に関しては、昔から次のような口承が存在する。

有名喇嘛三千六、無名喇嘛如牛毛。

有名な僧侶だけで、3,600人がある。名も知られない僧侶は、牛の毛のように無数であって数えられない、というのである。

モンゴル語で記述される寺誌『瑞應寺』⁽²⁾によれば、清朝後半期、蒙古鎮(現在の阜新蒙古族自治县佛寺鎮)には、国に登録された仏教寺院(ulus dü neretei süm-e 格根蘇莫)と、県に登録された仏教寺院(qosigun süm-e)と、村に登録された仏教寺院(ai-l no süm-e)とで、約300の寺院があったという。僧侶の数は20,000万人にのぼり、瑞應寺だけで僧侶の数は、3,000人にのぼると記している。清朝の康熙四十二年(1703年)、康熙皇帝は、モンゴル語・チベット語・中国語・満州語で表記した「瑞應寺」という寺名の勅額を贈った⁽³⁾。

瑞應寺の第一世の活仏チャガン ディヤンチ ホトクト・サンダン サンボ(Cagan diyanci Qutugtu Sañdan bzañbo 桑丹桑布 1633-1722)に、

Jegün gajar un monggol no ebugen Borqan..⁽⁴⁾

東土におけるモンゴルの長老仏

という称号を贈った。

瑞應寺は、180年を費して完成されたモンゴルの仏教大寺院である。仏像は10,000体以上が数えられたといい、内モンゴル東部地域の宗教、医学、文化などの中心地でもあった。しかし、1949年10月の中国解放後、特に文化大革命(1966～1976)などの影響やその打撃から、宗教活動はすべて禁止され、建物で残ったのは「大雄宝殿」だけであった。大雄宝殿が残ることができたのは、食糧機関の倉庫として使用されたからである。文化大革命の時、何1,000人もの料理を同時に調理することができる銅製の鍋を鑄つぶして、阜新市の中心地に毛沢東(1893-1976)の像を造った。それは今日も残っている。活仏居住の寺院は佛寺鎮の役所に転用され、西側の建物は佛寺蒙古中学校に転用され、東側の建物は郵便局に転用された。哲学修学の学問寺は佛寺小学校に転用され、モンゴル仏教の護法神である関羽廟は佛寺病院に転用され、医学修学の寺院は電力会社に転用された。このように瑞應寺は、役所や他の機関に転用された⁽⁵⁾。

モンゴル仏教で山や森に籠って修行を行なっている行者を、モンゴル語でディヤンチ・ラマ(diyanci lhama)と呼ぶ。

瑞應寺の開祖第一世の活仏チャガン、ディヤンチ ホトクト・サンダン サンボは、現

在の遼寧省阜新モンゴル自治区佛寺鎮の周辺にある山で、16年間坐禅と念仏をしたと記録されている。第一世の活仏チャガン ディヤンチ ホトクト・サンダン サンボは、多くのモンゴル人の信仰を受け、後に上述した瑞應寺を建立し、徐々に名声を広げ、チベット「西藏」に対して瑞應寺を「東蔵」という程、モンゴルの地の仏教聖地として知られるようになった。

第一世の活仏チャガン ディヤンチ ホトクト・サンダン サンボは、22歳から佛寺鎮周辺にある村山のソボルガン・アグイ (soborgan agui) という山の洞窟において四年間坐禅と念仏を修行し、カダン・ホゾー (kadan hozou) という村にある山の洞窟において二年間坐禅と念仏を修行し、ムングンブル (münggünbürü) という洞窟において六年間坐禅と念仏を修行し、イマガツ (imagatu) という洞窟において二年間坐禅と念仏を修行し、カダン・マイダリ (kadan mai dari) という洞窟において1年間坐禅と念仏を修行し、カダルツ (kadartu) という洞窟において1年間坐禅と念仏を修行した。合計16年間にわたって坐禅と念仏を行なった。こうして、母なる一切衆生を六道輪廻から解脱させるために、一心不乱に坐禅と念仏との修行を実践したと記述されている⁶⁾。

後に内モンゴル自治区にあるドメドジェグンホシグン (tümed jegün qosigün 土默特左翼東旗) 県の知事バイラ・ノヤン (baila) を始め、多くの仏教徒は、第一世の活仏チャガン ディヤンチ ホトクト・サンダン サンボに、坐禅と念仏との修行を開いて、多くの仏教徒に説法 (nom nomlaqu) するように願った。これに応じて、第一世の活仏チャガン ディヤンチ ホトクト・サンダン サンボは、慈悲心を起こして、坐禅と念仏とを開き、多くの衆生を利益するために説法を始めたと伝えられる。

その頃、清朝の康熙が皇帝に即位したばかりであった。康熙は、国家をどのように治めたらよいか、大変悩んでいた。それで自ら中国全土を巡察することにした。つまり、現地調査を行なったのである。『瑞應寺』の寺誌には、モンゴル語でエルジゲ・オヌン (eljige onun) という言葉がある。つまり、移動は驢に乗って巡察した。現在の阜新モンゴル自治区佛寺鎮のシルフィン・アイル (sirqu in ail 沙日海音艾里) 村を巡察していた時、村人の一家で結婚式を行なっている場面に出会った。康熙皇帝は、この村人がこの日に結婚式を選んだことを、自らの占いで見て知っていた。しかし残念なことに、この日は最悪の凶日であった。つまり日本でいう仏滅であったと考えられる。従って康熙皇帝は、結婚式を行なっている家を探ね、家の主人に「yamar kümün tan nu ene qorim kikü edür ki tülgeden ügkügsen boi?»⁷⁾ つまり、誰がお宅の結婚日を占ったのか、と尋ねた。家の主人は、隣りの山の洞窟に籠って坐禅と念仏をしているエルダムツ・ラマ (erdamtü lara 高僧、智慧がある意味、以下の高僧は第一世の活仏チャガン ディヤンチ ホトクト・サンダン サンボを指す) の名を挙げた。康熙皇帝は、その家の結婚の祝いの馳走にあずかってから、山の洞窟に籠って坐禅と念仏を修行している高僧を探ねた。洞窟で康熙皇帝は、坐禅と念仏

を修行している高僧に

emüne aıl no nige ger un bari bagülgan abcu baıga edör ki ta tülgedaen üjegsen u-? ene edö
r demei üljeitü edör bosu, yagakin i-mu edür ki songgugsan boi? ⁽⁸⁾

南にある村の家の結婚日を尊者が占ったと聞いた。しかし私の考えでは、この日は最悪で、吉祥日ではないように思われる。なぜ、尊者がこの日を選んだのか、

と訊ねた。

高僧は次のように返答した。

ene edör ketöi üljei boso edör bolbacu altan oton ene ger ki gereltügülin soyorqaqu tola yamar
üljei boso ucir baıbacu arilugad üljei amugulang bolqu yom ⁽⁹⁾

この日はいかにも、吉祥ではないが、金星（康熙皇帝のことを指す）がこの家を照らしてくださるから、いかなる不吉なことがあっても、すべてが吉祥に転じて幸せになる筈である。これは間違いがない

と答えたという。

このような尊者のことは聞いて康熙皇帝は、この坐禪と念仏とを修行をしている高僧を大変尊敬したとされる。その後さらに、様々なことについて話しあったという。

ダルカン・ホシグン (darqan qosigun 現在の内モンゴル自治区通遼市の科左中旗) のチンワン・エボ (cin wang efo 日本の市長に相当) 王は、病気になったため、あちらこちらで治療したが、病気がなかなか全快しなかった。家族に訊ねたところ、山の洞窟で坐禪と念仏をを実践している一人の高僧が、多くの村人の難病を治療し、癒していると知った。こうしてチンワン・エボ王は、山の洞窟に坐禪と念仏をしている高僧を尋ね、病気の平癒を願うと、病気はみるみる全快したという。この高僧は、チンワン・エボ王の信仰を受け、篤く尊敬されたという。

こうして、第一世の活仏チャガン ディヤンチ ホトクト・サンダン サンボは、長年にわたった坐禪と念仏との結果、清朝の康熙皇帝を始め、地元の王や多くの民衆の信仰を受けることができた。やがて説法する場所としての寺院を建立する必要が要請された。地理的に北と東西に山があり、南に河がある聖地を選んだ。清朝の康熙八年 (1669 年) から建設を計画し、地元の王を始め、多くの民衆の理解と協力を得て寺院を建立が開始された。清朝の康熙十六年 (1677 年)、ダライ・ラマ五世ガワンロサンギャンツォ (Nag dbań blo bzań rgya mtsho 阿囉・羅桑加措 1617-1682) から「Cagan diyanci Qutugtu」チャガン ディヤンチ ホトクトという聖号を賜ったとされる ⁽¹⁰⁾。

なお、瑞應寺の寺名は、清朝の康熙四十二年 (1703 年)、康熙皇帝は、活仏への感謝の意を込めて、モンゴル語・チベット語・中国語・満州語で表記した「瑞應寺」という寺名の勅額を贈った。後に釈尊の教えをモンゴル語に翻訳した『大蔵経』を、北京から瑞應寺に請来したとされる。こうして徐々に東モンゴルの地域で最大の伽藍になった。瑞應寺の周

辺 20 キロメートルにわたって 10,000 体の石仏像が造られた⁽⁴¹⁾。

瑞應寺は、東モンゴル地方の宗教、医学、文化交流の中心となり、中国東北地方で最大の仏教寺院として知られる。第一世の活仏チャガン ディヤンチ ホトクトから現在に至るまで七世にわたって伝承されている。

『阜新蒙古族自治县民族志』によれば、さらに清朝の道光四年（1824 年）清朝の理藩院は、第四世チャガン ディヤンチ ホトクト活仏（1753-1834）に、満州語・モンゴル語・チベット語で彫った「tümed un jasag da lhama Cagan diyanci Qutugtu in tamaqa 東土黙特札薩克達喇嘛察第顏齊呼図克図之印」、つまり、東モンゴル地方の聖なる高僧チャガン ディヤンチ ホトクト活仏という印鑑を贈ったと記録されている⁽⁴²⁾。

3. 梵宗寺の丹迥・冉納班雜活仏の禅浄の實踐

内モンゴル自治区や中国の東北三省、北京周辺では、活仏として尊崇されている内モンゴル自治区赤峰市梵宗寺寺主である丹迥・冉納班雜活仏五世（以下は丹迥・冉納班雜活仏と称する）は、中国藏語系高級仏学院（チベット仏教大学）の教務所長、中国仏教協会理事であり、承德市普寧寺名誉住職にもなっている。

丹迥・冉納班雜活仏は、12 年間にわたって坐禅と念仏の修行を行なったと伝えられる。私が訊ねたところ、丹迥・冉納班雜活仏は、12 年間横になって寝たことがなかった。特にここで説明しておきたいのは、中国の解放（1949 年 10 月）後、中国で多くの運動が行なわれたことである。例えば、僧侶が「喇嘛教肅反運動」や「牛鬼蛇神」などという名目で捕まって被害を受けたりした。丹迥・冉納班雜活仏も被害を受けなければならないひとりであった。しかし公安部の警察は、活仏を捕えることができなかったという。モンゴル仏教徒の話では、警察が丹迥・冉納班雜活仏を逮捕しようとしてやって来た直前に活仏は気付いて、警察が現われる場所から消えてしまったと言われている。これは活仏が仏教の教えにある「他心通」を得ていたからであり、その瞬間その場所で直ぐに判断できたと考えられる。丹迥・冉納班雜活仏は、チベットで九世に伝生したとされる。チベット自治区ラサ市にある色拉寺のグンガノルポ（Kun dgañ hor po 貢噶俄日布 1754-1818）活仏は、ダライ・ラマ八世ジャムバルギャンツォ（hJam dpal rgya mtsho 隆朵嘉措 1758-1804）の信書をもって、内モンゴル自治区赤峰市梵宗寺のある翁牛特旗に来て、諸悪を降伏し、幸福を祈祷したとされる。こうして、グンガノルポ活仏は、多くのモンゴル人の信仰を受け、梵宗寺の第一世活仏として招請された⁽⁴³⁾。グンガノルポ活仏は、ジャンジャ・ホトクト（Zang skya Rol pañi edo rje ye šes thob pañi bsod nams dpal bzañ po 章嘉・羅賴畢多爾吉耶喜忒皮嚙納曼伯拉森波）の経師（師匠）を勤めたことがある。ジャンジャ・ホトクトは、内モンゴル地方

や中国の東北三省、北京で最大の活仏である⁽⁴⁴⁾。

文化大革命終結後、1978年12月18日の第11期第3回中央委員会全体会議（中共十一届三中全会）における全国宗教政策の発表によって、活仏や僧侶は自由になり、共に一般中国人の一人として認められるようになった。新しい宗教政策の実施によって、中国の宗教活動は、地方でも次第に回復していった。とりわけ中国の対外解放政策の発表によって、大都市の寺院の再建や、僧侶の募集など様々な活動が行なわれるようになった。

文化大革命終結後、丹迥・冉納班雜活仏は、仏教学だけでなくモンゴル医学にも精通していたので、まず、内蒙古医学院にモンゴル医学の教授として招聘され、阜新モンゴル自治県にあるモンゴル医学研究所の教授として招聘され、更に内モンゴル自治区にある通遼モンゴル民族医学院にも招聘された。活仏は、文化大革命終結後、取り敢えずモンゴル仏教の特徴である医学を方便として、仏教を高揚するよう努力し、丹迥・冉納班雜活仏は、仏教芸術であるチベット仏教とモンゴル仏教の曼荼羅についても、大変深い研究を成し遂げている。実は、丹迥・冉納班雜活仏は、文化大革命の最中に、パンチェン・ラマと連絡を取ったとされているが、仏教でいう神通力で行ったり来たりしたと考えられる。こうして、中国蔵語系高級佛学院（チベット仏教大学）を創立する準備段階から、パンチェン・ラマの招聘によってさまざまな準備に尽力されている。

1987年、中国蔵語系高級佛学院は、中国仏教協会名誉会長である第十代班禪大師（パンチェン・ラマ）と中国仏教協会の前会長趙樸初の唱導によって、中国共産党と国務院との許可を得て創設されたチベット仏教最高の大学である。開学は、1987年9月1日、北京のチベット仏教寺院である名利西黄寺において行なわれた。丹迥・冉納班雜活仏は、モンゴル仏教の活仏第一人者として入学した。卒業後、そのままチベット仏教大学に教務処（所）長として採用された。

中国蔵語系高級佛学院は、チベット地方とモンゴル地方の転世活仏と、それぞれの寺院で推薦された青年学僧を迎えている。筆者は、当大学第3期生であった。ただ当時モンゴル人は一学年45人中、3～4名に過ぎなかった。活仏の存在は、チベット・モンゴル仏教思想の基である。活仏中心のこの大学では、チベット・モンゴル仏教の種々の教義、および中国仏教について研究することができる。特に現在では、様々な機関を経て活仏に指名された者は、チベットであれ、モンゴルであれ、各地方で一定期間修行した後、最終的にこの中国蔵語系高級佛学院に入学しなければならない。卒業時に、パンチェン・ラマの印章を押した卒業証明書を授与されることで、初めて「転世活仏」とされ、「転世真者」として内外に認知されることになる⁽⁴⁵⁾。

20世紀初頭に始まる中国大陸を舞台とした戦乱、それに続く文化大革命が終結するまでの国内の混乱によって、五十六を数える中国諸民族固有の民族文化や、諸民族固有の宗教信仰は甚大な被害を蒙った。丹迥・冉納班雜活仏の梵宗寺もその例外ではなかった。梵宗寺

のすべての活動は禁止され、建物で残ったのは「大雄宝殿」だけであった。大雄宝殿が残ることができたのは、食糧機関の倉庫として使用されたからである。

こうして1987年には、梵宗寺は寺主である丹迥・冉納班雜活仏に返換された。そして復興の準備や支援金などを国際的に募集した。1998年にかけて、多くの国内外の理解と協力を得て、中国人民幣で約1,200万人民幣元（約日本円で1億5千万円）を投入して梵宗寺の修復工事が始まった。修復されたものは以下の通りである。

梵宗寺の広場・天王堂（日本仏教寺院の山門に相当）・鼓楼・鐘楼・客殿・僧舎・転經堂・閻帝堂・羅漢堂・五大金剛堂・大雄宝殿（本堂）・延寿三尊堂・大藏經堂・弥勒堂・時輪金剛堂・二十一度母堂であった。そして、僧侶を育成のために梵宗寺境内に教室・図書室・医学室・パソコン室なども新しく建立された。将来は、モンゴル仏教大学を設立することを予定している。現在、梵宗寺は、規模は内モンゴル地方で、最大のモンゴル仏教寺院として知られ、内モンゴル自治区の重要文化財となっており、約25名の僧侶が修行している。僧侶たちは、毎朝4:30に起き、6:30まで所定の朝課を勤め、坐禅と念仏の修行を厳修している。7:00から7:30までは朝食の時間になっており、8:00から10:00時まで大雄宝殿において法要を執り行っている。10:10から12:00まで仏教学などの授業を行なっている。12:00から14:00までは、昼食と休憩の時間である。14:00から17:30までは語学の授業を行なっている。例えば、僧侶は、モンゴル語、チベット語、中国語、英語などを勉強している。18:00から18:45までは夜の食事の時間であり、19:00から19:30まではテレビニュースを見る必須の時間とされている。19:30から21:30までは坐禅や念仏の時間とされている。22:00からは就眠の時間と決められている。

中国の解放以前は、約500名の僧侶が修行していたと伝えられている⁽¹⁶⁾。

因みに1998年4月、愛知県仏教会（前会長の岩田文有師）の招聘を受け、愛知県仏教会の想念寺（渡辺観立住職）副住職の渡辺観永師のご協力で、丹迥・冉納班雜活仏を始め、モンゴル仏教の活仏2名が来日し、仏教会や大学などで「草原の祈り（モンゴル仏教を聞く）」という形で記念講演会や交流会などを実施した。モンゴル仏教の活仏が2名揃って来日するのは有史以来初めてのことであった。また表敬訪問という形で愛知県仏教会の主催によって、43名の仏教会員と壇信徒とが、岩田文有会長を団長としてモンゴル仏教の北京雍和宮・チベット仏教大学・内モンゴル自治区の首府にある仏教寺院を訪問し、世界遺産に指定された承德市普寧寺でモンゴル仏教僧侶と日本仏教僧侶との共同法要を開催することができた。これも史上初めの快挙であったといえる⁽¹⁷⁾。

4. 結びに代えて

モンゴル仏教の僧侶は、坐禅と念仏との修行を成就しなければ、密教でいう阿闍梨にはなれないとされる。

私が修学した雍和宮⁽¹⁸⁾でも、毎年「閉関 sam dur sogoqu」と呼ばれる坐禅と念仏とを行なっている。多くのモンゴル仏教の僧侶は、毎朝2:30頃から、坐禅と念仏とを厳修している。この中で特筆したいのは、102歳で往生したゲトン(dge ḥdun)長老である。ゲトン長老は、小さい時から雍和宮に入門して仏教を修学してきた。1981年、私たちが雍和宮に入門した時、ゲトン長老は、雍和宮の経頭であった。ゲトン長老は、毎朝2:30から5:30まで坐禅と念仏との修行を実践し、休むことがなかったと聞いている。雍和宮の毎朝の勤めは、朝6:00から7:30まで、法輪殿で、80名のモンゴル仏教の僧侶によって厳修されている。

ゲトン長老は、往生する3日前に弟子に、

私は3日後に往生するので、新しい袈裟を準備して下さい。

と頼んだという。弟子は、ゲトン長老が、とても元気だったので、冗談を言っているのではないかと思ったが、それでも、雍和宮の住職に報告した。住職は、取り敢えず新しい袈裟を準備するように指示した。3日後、ゲトン長老は新しい袈裟を着用して坐禅を組んで念仏したまま、往生した。その時、筆者は日本に留学中であった。

すべての人々は「眼横鼻直」⁽¹⁹⁾の教えのように、心を定め心を清らかにして一心不乱に坐禅と念仏とを修行すれば、善悪を判断する智慧が生じると考えられる。そうした上で、「人となる道」を日常生活の中で達することは夢ではない。中国仏教の高僧たちは、説法に際して、常に「人成則仏成」と教えている。つまり、人は仏教の教えである「十善」を基本として毎日の生活を送れば、罪を滅し、善を積むことによって成仏の道が見えてくる。今日、世界大都市の人々の生活はとても忙しい。しかし、だれでも毎日、5分から10分程度の時間をさくことは可能と考える。そこで、「眼横鼻直」の教えのように坐禅と念仏とを行えば、毎日の生活が充実してくると思われる。ノーベル賞を授与された東京大学の小柴昌俊教授が、いろいろな講演会でいつも、「人はやればできる」と教えているように、仏教の教えも修行し実践することによって仏教の坐禅と念仏との真理を体得できることは間違いないと思われる。

仏教の僧侶は、民衆の協力なしに悟りを得るなどあり得ないことである。

『大モンゴル禅人宰相耶律楚材』⁽²⁰⁾によれば、洞山禅師の「平常底」とは、寒くなったら暖かにする、暑い夏には涼をとる、渴いたら飲む、飢えたら食べる、閑があったら禅をする、眠くなったら眠るである。

無心、調心、平常心、平常底、坐禅と念仏などと表現は異なるが、その意味に違いはな

い。ただ世法に活用できるか否かが問題で、その評価も違ってくるだけのことでありと述べている。

例えば、原始仏教の時代比丘たちは、坐禅し、そして、民衆の家に托鉢していたことは周知の事実である。

原始仏教研究の大家である文化功労者前田惠學博士は、

上座仏教で一人の修行者が、悟りを求めて洞窟に入り修行するとする。実は一人で洞窟に入っても、そのあと困ってしまう。食事をどうするのか。上座仏教の修行者は戒律の問題があって、自分で食事を作ることができない。薪を焚こうとして、もしも薪の中に虫が入っていたら、殺生戒を犯すことになる。だから、食事は在家信者の家から布施してもらうのである。南方の国々で僧侶たちが毎朝托鉢に出るのはそのためである。だから修行者は、洞窟に入る前に在家信者の家に行き、これから修行したいと思うが食事を毎日運んでもらえるかと頼む。了承を得た上で、洞窟の修行に入るのである。とにかく在家の人の援助がなければ、一人で修行することなど事実上不可能なことである

と考えておられる⁽²⁾。

因みに、チベット仏教の有名な「即身成仏」である行者ミラレーパ (Mi la ras pa 米拉日巴 1040-1123) も、雪山の洞窟で坐禅と念仏を行なった際、実の妹が食事を運んでいたと伝えられる。

上述したモンゴル仏教の瑞應寺第一世の活仏チャガン ディヤンチ ホトクト・サンダン サンボも、梵宗寺の丹迥・冉納班雜活仏も、多くのモンゴル仏教徒の協力があって坐禅と念仏を修行し実践することができたと考えられる。こうして解脱し、ないし悟りを得、最終的に民衆救済の菩薩行を行なうことができたと考えられる。だから、モンゴル仏教の教えでは、一切衆生は、解脱・成仏するための「福田」(boyan no oron) であると、感謝を込めて廻向するのである。こうして、悟りを開いた活仏も、「慈・悲・喜・捨」(mettā karuṇā muditā upekkhā) による知恩・報恩・感謝をもって再び娑婆世界に「乘願再来」すると、モンゴル仏教徒に信仰されているのが、モンゴル仏教徒の宗教意識であると考えられる。

《注》

- (1) 拙論『モンゴル仏教の研究』(法蔵館、2004年) 1～3頁。
- (2) 陶克通嘎等編『瑞應寺』(Togtonga, *Gaiqamsig joqiragulugci süm-e*) 中国内蒙古文化出版社、1984年 10～13頁。現在、瑞應寺で約60名のモンゴル仏教の僧侶は修行を厳修している。
- (3) 陶克通嘎等編『瑞應寺』(Togtonga, *Gaiqamsig joqiragulugci süm-e*) 中国内蒙古文化出版社、1984年 30～31頁。
- (4) 陶克通嘎等編『瑞應寺』(Togtonga, *Gaiqamsig joqiragulugci süm-e*) 中国内蒙古文化出版社、1984年 11頁。
- (5) 項福生主編『阜新蒙古族自治県民族志』(中国遼寧民族出版社、1991年) 94頁。

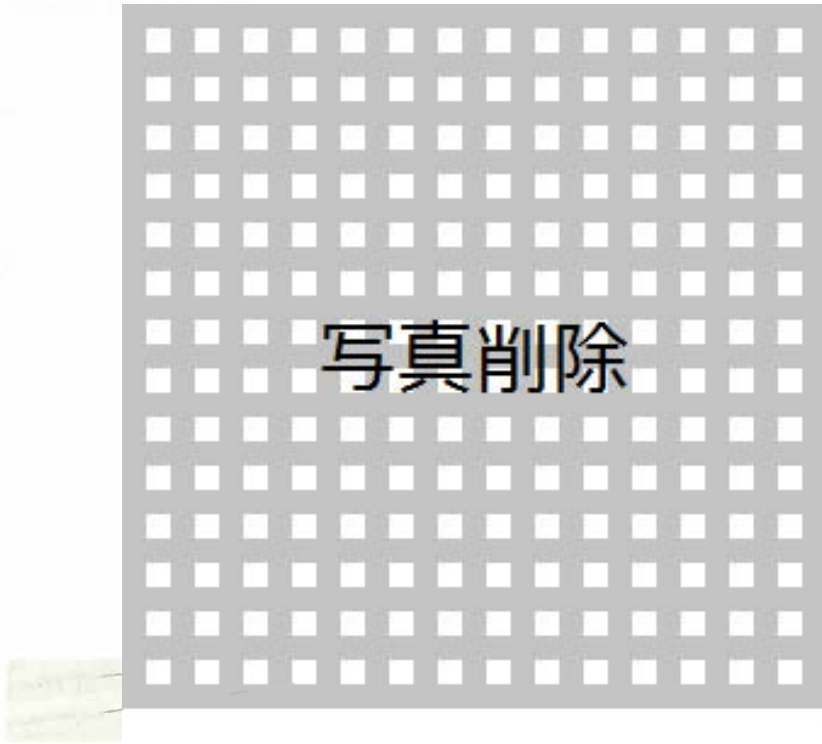
- (6) 陶克通嘎等編『瑞應寺』(Togtonga, *Gaiqamsig joqiragulugci süm-e*) 中国内蒙古文化出版社、1984年 23 頁。
- (7) 同上 24 頁。
- (8) 同上 25 頁。
- (9) 同上 25 頁。
- (10) 同上 26 頁。
- (11) 同上 31 頁によれば、活仏は一生懸命よく国家と民衆とのために智慧を果たしたことに對する記念として贈ったと記載されている。
- (12) 項福生主編『阜新蒙古族自治県民族志』(中国遼寧民族出版社、1991 年) 94 頁。
- (13) 『梵宗寺』(2001 年)。
- (14) 詳細は、拙論「チベットとモンゴル仏教における活仏の由来」(『同朋大学佛教文化研究所紀要』第 21 号、2001 年) 19～49 頁。
- (15) 那倉主編『十年歷程(慶祝中国藏語系高級佛学院建校十周年)』(中国宗教文化出版社、1997 年)。
- (16) 張嶸「塞外名刹梵宗寺」(『当代中国』、当代中国画報社、2004 年 6 月号) 24～25 頁。
- (17) 丹迥・冉納班雜活仏たちが、訪日について、『京都新聞』1998 年 4 月 7 日号に「モンゴル仏教交流で盛んに」、また『週刊仏教タイムス』1998 年 4 月 7 日号に「内モンゴル僧が入洛、西本願寺などを訪問」など『中外日報』、中日新聞などに記載された。
- (18) モンゴル佛教大寺院である北京雍和宮の詳細は、拙論「文化大革命後のモンゴル仏教の様態—北京市雍和宮と承德市普寧寺を中心として—」(『パリー学仏教文化学』第 16 号、平成 14 年、82～95 頁を参照されたい。
文化大革命以前の北京には、モンゴル仏教寺院は、38 寺があった。文化大革命の最中に、38 寺の中の 37 寺が破壊され、唯一残ったのは、北京雍和宮だけである。文化大革命の最中に、中学生や高校生を中心とした紅衛兵が、雍和宮を壊しに入ってきた。この情報を、当時の住持である高全寿師が、直接周恩来総理に電話で報告した。周恩来総理は、直ぐに、部下の韓念龍秘書を雍和宮に派遣し、紅衛兵を説得した。周恩来総理のお蔭で雍和宮は幸存することができた。雍和宮だけが残ったのは、こういう理由からである。1978 年 12 月の第 11 期第 3 回中央委員会全体会議で、新しい中国の宗教政策が発表された。3 年後の 1981 年には、雍和宮で法会などを始めとして仏教活動が再開された。
- (19) 東隆眞「眼横鼻直」(『大法輪』第 71 卷、平成 16 年第 4 号) 21 頁。
- (20) 飯田利行『大モンゴル禪人宰相耶律楚材』(柏美術出版社、1994 年) 26～27 頁。
- (21) 前田惠學『前田惠學集(仏教とは何か、仏教学はいかにあるべきか)』第 2 卷、山喜佛書林房) 71～72 頁。

所属・職： 中国社会科学院世界宗教研究所講師、同朋大学仏教文化研究所客員所員



復興した梵宗寺大雄殿





法會後



弥勒殿



梵宗寺本尊弥勒佛